



フランス語の訳し方



対象者：フランス語・語学に関心がある人

案内人：MOMO

I. イントロダクション

この「道しるべ」は、フランス語の文法はひと通り学んだ、次はフランス語から日本語に翻訳してみたい、という人のために作りました。でも、いきなり訳すのって難しいですよ。教科書の文法から一歩踏み込んだ説明がほしい、あるいは、和訳と翻訳ってなにが違うの、と思われるかもしれません。手がかりとなる本のうち、大型書店の語学書の棚でもあまり並んでいないものをご紹介します。

キーワード：フランス語、翻訳、文法、日本語、翻訳研究

II. フランス語をどうやって日本語に訳せばいいの？

■朝比奈誼,1995,『フランス語和訳の技法』白水社。[絶版]

フランス語翻訳の技法、ではないところがポイントです。翻訳する前にまず、正確に和訳ができるようになる必要があります。本書ではフランス語学習者が日本語に訳すときにつまずきやすい、所有形容詞や関係代名詞、後半はレトリックや語法といったトピックが扱われます。読み物としてもおもしろいです。

■鷺見洋一, 2003, 『翻訳仏文法 上・下』ちくま学芸文庫。

フランス語を日本語で表現するための本です。辞書で調べたことを繋ぎ合わせて、なんとなく日本語で意味が通じるように訳を作ってしまうがちな人には特におすすめ。豊富な例とともに個々の文法項目から文、文章の訳し方へと展開していきます。(2022年8月に復刊されました!)

III. そもそも翻訳ってある言語から別の言語に「変換する」こと？

■マシュー・レイノルズ (著)・秋草俊一郎 (訳), 2019, 『翻訳—訳すことのストラテジー』白水社。

疑問解決の第一歩にはこの本がおすすめです。原書は2016年に出されたオックスフォード出版社の入門書で、翻訳研究についての主要な論点がわかりやすく紹介されています。気になるトピックは巻末の「日本の読者向けの読書案内」に載っている関連書で深掘りできます。

■平子義雄, 1999, 『翻訳の原理—異文化の訳し方』大修館書店。

カンや実践経験、センスに頼ることのない「翻訳の原理」を提示することをテーマに据えた本です。テキストの種類によって翻訳はいかに異なりうるかが、コンパクトに紹介され

ています。充実した参考文献・索引は次の読書の手がかりにもなります。

IV. 日本語で翻訳することの可能性は？

■フランス・ドルヌ・小林康夫, 2005, 『日本語の森を歩いて—フランス語から見た日本語学』講談社現代新書。[絶版]

なぜ水ではなく「お湯を沸かす」と言うのか、考えたことはあるでしょうか。日本語話者がふだんなかなか気に留めない言い回しを、フランス語を母語とする言語学者が観察し、パートナーの哲学者が対話しつつまとめた本です。「フランス語から見た日本語」のレンズを借りながら、広くことばについて考えられます。

■柳父章, 1982, 『翻訳語成立事情』岩波新書。

日本語は和語、漢語、外来語を組み合わせています。幕末から明治にかけて西洋の文献が大量に翻訳された際、西洋の概念を輸入するために新たに作られたり、意味を付け加えられた漢語が、本書に出てくる翻訳語です。「社会」「恋愛」「自然」……現在の日本語には欠かせない具体的な翻訳語とともに、翻訳語が作られた背景や翻訳語のもつ効果にまで話は及びます。

■柳瀬尚紀, 2009, 『日本語は天才である』新潮文庫。[絶版]

アイルランド出身の作家ジェームズ・ジョイスの『フィネガンズウェイク』という奇書をご存知でしょうか。いろいろな言語、造語、ことば遊びを交えて書かれており、翻訳不可能な本の代名詞として引き合いに出されるほどです。その日本語訳者による、翻訳を通して観察した日本語についてのエッセイです。